

Possible association between early formula and reduced risk of cow's milk allergy: The Japan Environment and Children's Study

手塚, 純一郎

<https://hdl.handle.net/2324/4475225>

出版情報 : 九州大学, 2020, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :

権利関係 : © 2020 The Authors. *Clinical & Experimental Allergy* published by John Wiley & Sons Ltd. This is an open access article under the terms of the Creative Commons Attribution-NonCommercial License, which permits use, distribution and reproduction in any medium, provided the original work is properly cited and is not used for commercial purposes.

(別紙様式2)

氏名	手塚 純一郎
論文名	Possible association between early formula and reduced risk of cow's milk allergy: The Japan Environment and Children's Study
論文調査委員	主査 九州大学 教授 澤 新一郎 副査 九州大学 教授 新納 宏昭 副査 九州大学 教授 古江 増隆

論文審査の結果の要旨

ピーナッツや卵については、生後早期から日常的に摂取することが、そのアレルギーに予防的な効果を示すことが報告されているが、牛乳についてはまだわかっていない。

本研究では、10万組以上の母子が参加する全国出生コホートであるエコチル調査のデータを使用し、ミルクの摂取時期が、1歳までの牛乳アレルギーに与える影響を検討した。暴露要因は3つの時期(0-3, 3-6, 6-12か月)のミルク摂取の有無とし、牛乳アレルギーのリスク比を算出した。牛乳アレルギーの定義は、①乳製品に対するアレルギー症状、②ミルクを含めた乳製品をアレルギーの評価時期に非摂取、③食物アレルギーの医師の診断、の3つを満たすものとした。統計学的な解析の結果、1歳時の牛乳アレルギーの減少と関連していたのは、3-6か月時の粉ミルク摂取であった。一方、0-3か月における粉ミルク摂取と牛乳アレルギーの摂取との関連はみられず、ミルクを早期に開始してもすぐに中止すれば、牛乳アレルギーに対する効果が失われる可能を示唆した。

以上の研究内容は、乳児期以降の牛乳アレルギー発症に3-6ヶ月に摂取した牛乳由来抗原が予防的に作用することを示唆しており、牛乳アレルギーの発症機序に関する新知見を付与する意義あるものと考えられる。

本論文に関する試験は、まず論文の研究目的、方法、実験結果などについて説明を求めた。次に各調査委員より専門的な知見から論文内容およびこれに関連した事項について種々質問を行なったが、概ね適切な回答を得た。なお、本論文は共著者13名であるが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。